

より道 わき道 散歩道

みなさんの好きな「道」はなんですか？近道、坂道、夜道...？私は「帰り道」が好きです。今回紹介する本は「より道 わき道 散歩道」。この本は、臨床心理学者の河合隼雄さんが毎日新聞に毎月1回、2年にわたって連載された「より道わき道散歩道」シリーズに、これまで新聞・雑誌・官報などに書いた文章を合わせて、1冊に編集し直したエッセイ集です。目次を見てみると、子ども、人間関係、人生、本、音楽、文化・社会、道草の拾いもの、の7つにテーマ分けされています。臨床心理学と聞くと難しく感じるかもしれませんが、平易な文章で書かれているので、きっと楽しめると思います。この中からわたしの気に入っているところを紹介します。

「三年寝姫」 この本の1番最初に載っているお話。河合隼雄さんと作家のよしもとばななさんがテレビ番組で対談したときのこと。よしもとばななさんは当時、27ヵ国語で作品が翻訳出版され、イタリアで受賞するなど国際的に活躍されていました。文化の差を超えて世界中の人々に読まれるのは、人間の心の深い層に存在する普遍的な現実を描く上手さがあるからだ、と河合さんは推測します。そのイメージーションの自由さと豊かさはどうして生まれたのか、その秘密に触れるため、彼女の子どもの時代について質問されました。すると「高校時代の三年を、私は寝て通しました」との回答。河合さんは以前より、「思春期、さなぎ説」というのを唱えていました。毛虫が蝶になる前にさなぎの時期が必要なように、人間もこどもが大人になる前に、内面的な大変化が生じるのを上手く乗り切っていく、というものです。昔話の「三年寝太郎」を例に挙げて、成長を遂げるためには相当分の閉じこもりが必要なことは昔の人も知っていたのだ、と。

昔話や物語、膨大な知識の中から、その人・その話題に応じたものを提示されるのが本当に見事で、得るものがたくさんあります。ばななさん以外にも、河合隼雄さんはいろいろな業種の方との対談集を残しています。安野光雅、安藤忠雄、佐渡裕、司馬遼太郎、谷川俊太郎、村上春樹、毛利衛、茂木健一郎...その道のプロフェッショナルの方々とお話をされる中で、どんな時でもあらゆる「発見」をされています。心理学的知見はもちろん、ジャンルを越えた根源的な部分での共通点など。まえがきには、「本道をひたすら一筋に歩むのではなく、より道やわき道にそれて、ふと考えることが、人生にはあんがい大切なのではないか」と書いておられました。

みなさんもこの夏、思索の散歩に出かけてみませんか。

河合隼雄（かわい・はやお）

1928/6/23 ~ 2007/7/19。兵庫県生まれ。京都大学理学部卒業。臨床心理学者。京都大学名誉教授。1962年にスイスのユング研究所に留学し、日本人として初めてユング派分析家の資格を取得。帰国後、京都大学教育学部で臨床心理学を教えるかたわら、ユングの分析心理学を日本に紹介し、その発展と確立に寄与。1995年、国際日本文化研究センター所長、2002年、第16代文化庁長官に就任。